

# 大川小教訓 学校防災考える

## 仙台でフォーラム



学校防災のあり方について議論する佐藤敏郎さん(右)、村上さん(中央)ら(23日、仙台市青葉区で)

東日本大震災で児童・教職員計84人が死・行方不明となった石巻市立大川小の津波被害などを教訓に、学校防災について考えるフォーラムが23日、仙台市青葉区のエルパーク仙台で開催され、市民や教育関係者ら約100人が参加した。

超党派の異議から作る実行委員会が主催。冒頭、同小3年の長男・健太君(当時9歳)を亡くした佐藤とも子さん(56)が遺族代表で登壇し、「最も安全なはずの学校管理下で、健太はなぜ死ななければならなかったのか。大切な人の命を守ろう守るのか、真剣に考えて

イスカッションでは、校内にいた12人の生徒全員が避難して助かった岩手県釜石市立釜石東中の当時の副校長、村上洋子さん(61)らが登場。同中では、震災前から近くの小学校との合同避難訓練や、中学生が防災知識を地域住民に教えていたと説明し、「平常時から防災について具体的に考えるべきだ」と、日頃の訓練や教育の重要性を訴えた。大川伝承の会共同代表で元中学教

答えを出してほしい」と涙ながらに訴えた。中学校にいて被災した東北福祉大4年の三浦貴裕さん(22)は、校庭から近くの山に逃げ、押し寄せた津波から間一髪で避難した体験や、震災伝承の取り組みについて説明した。「小さいときから『地震津波』という意識があったら助かっただろう。災害に対する心の備えが必要」と語った。その後行われたパネルデ

論の佐藤敏郎さん(右)は「大川小の現実から目を背けず、想定外の事態で子どもの命を守らなくてはならない」と話した。

### 教訓 未来へつなぐ

#### 学校の管理下で子の命どう守る

大川小遺族ら議論

東日本大震災の教訓を学校現場でどう生かしていかを話し合う「これからの学校防災を考えるフォーラム」が23日、仙台市青葉区で開かれた。超党派の異議から作る実行委員会が主催。児童や教職員計84人が犠牲となった石巻市立大川小の遺族らも加わり、集まった約100人が未来の命



これからの学校防災のあり方を議論するパネリスト＝仙台市青葉区

### 子どもファーストで 仙台で学校防災フォーラム

#### 「マニュアルには限界」

東日本大震災の経験を踏まえた学校防災の在り方を探る「これからの学校防災を考えるフォーラム」が23日、仙台市青葉区のエルパーク仙台であった。異議会有志グループが主催し、教育関係者ら約100人が参加した。



パネル討論で学校防災の課題を指摘する(右から)佐藤代表、村上副校長、鈴木准教授

パネル討論では、釜石市釜石東中の村上洋子副校長(61)が「防災の課題を整理し、解決方法を具体化する」のが学校管理職の役割と強調。日大危機管理学部助教授の鈴木秀洋准教授は「自分の命を守るかをいっしょに考えてもらおう」が安易に使うべきではない。想定を積み重ねてマニ

が登壇。「健太は避難中、先生の言うことを聞いていたが大丈夫だと自分に言い聞かせていたと思う。学校管理下で、どうすれば子どもの命を守るのか。それが考え、一人でも多くの命が救われてほしい」と声を震わせて訴えた。

パネルディスカッションでは、震災当時の岩手県釜石東中の副校長村上洋子さんが、校内にいた生徒全員が無事避難し、「奇跡」と呼ばれた同校の事例を紹介。日大からの自分の命は自分で守る「津波でいってこ」の教えを伝えていたと振り返り、「実践的な訓練ができるかは管理職の仕事。」

両が降っても、校長不在でも、本番を想定して訓練する必要はある」と話した。日本大学の鈴木秀洋准教授(危機管理)は「上から教え込むのではなく、子どもの意見を聞き、主体的に考えさせることが重要」と指摘。大川小6年生だった次女みずほさんを亡くした元中学教諭の佐藤敏郎さんは「必要なのは分厚いマニュアルを作るのではなく、会議を増やすことではない。考えの中心に子どもの命があるかどうかが、釜石のよう」に教訓を未来につなげる取り組みを私たちができているのか」と呼びかけた。(山本浩生)

ニユアルを厚くしても、想定外に対応できない」と訴えた。

4月に南三陸町の「南三陸研修センター」に就職する同町出身の東北福祉大4年三浦貴裕さん(22)による防災活動の発表もあり「意識が変われば行動が変わる。古里のために働き、自分の未来も切り開いていきたい」と語った。

